

東南アジア史学会第 67 回研究大会

報告要旨集

* この要旨集は WEB 上に公開されていたデータをもとに情報化担当が再構成したものであり、研究大会当日に配布されたものではありません。

A 4 本『大越史記續編』小考

蓮田 隆志（大阪大学大学院）

ベトナム前近代史研究の基本史料たる『大越史記全書』（TT）は、15世紀の成立以降、後期黎朝治下の17世紀後半に2度続修されたことが知られている。1度目は1665(景治3)年、1662年までの部分が編纂されたが、半分余りが刊刻に付されたのみで完成を見ず、秘閣に蔵されたという(景治本)。2度目は1697(正和18)年、1675年までを増修した上で、全24巻に纏めて刊行された(正和本)。そして現パリ・アジア協会蔵本が最も正和原刊本に近い版本とされている。

現在ハノイの漢文・チューノム研究院（ハンノム院）が所蔵し、A4の架蔵記号を附せられた『大越史記續編』なる四冊本が存在する。これは阮朝宮廷書庫蔵本の極東学院用写本であるが、現存本の構成は諸先学の紹介・考証と微妙な相違を見せている。そこで報告者は構成について若干の考証を加え、ハンノム院現蔵本は、フエ宮廷聚奎書院旧蔵「越史續編」を核とした合綴本で、極東学院用写本作成段階で別本が同綴され、更にハンノム院移管後に一旦巻頭の一部が脱落したものと推定した。

ところで、1988年にベトナムのゴー・テー・ロンが景治本の残巻とされる刊本を紹介した（以下「残巻」）。残存部分は1600-1643及び1655年末-56年年初にかけての部分だが、正和本とは明らかに内容を異にし、かつ詳細な記述がなされている。ロンの考証には不十分な点もあり、景治本と断定するにはなお問題がある。だが、92年に出された影印と併せて検討したところ、少なくともこの史料が後期黎朝治下で作られたTT系統の史料であることは疑いない。すなわち後期黎朝史にとって極めて重要な新出史料と言える。

A4本の前半部は、避諱からみて19世紀の嗣徳朝以降の写本であることは間違いない。だが「残巻」と比較したとき、若干の字句の異同を除いてほぼ完全に一致し、巻頭の書式も共通している。繫年のずれなど若干の問題は存在するが、「残巻」と同系統の史料と見て間違いない。他の部分が正和本の不完全な写しなのと異なり、この部分こそ、A4本の中で独自の史料価値を有する部分なのだ。

その内容については、ペリオ以来、正和本系諸本と大きく異なることが紹介されている。しかし、先学はいずれも特に史料価値を認めず、ために従来殆ど利用されてこなかった。ここで叙上の推定を是とするならば、我々は、正和本の記述が極めて簡潔な16～17世紀前半について、より詳細かつ独自の記述を持つ根本史料を入手することができたことになる。

アユタヤの対明関係 外交文書から見る

ピヤダー・シヨンラオン（広島大学大学院）

前近代における中国の明（1368～1644）と東南アジア諸国が、明中心の「華夷」概念に基づく冊封・朝貢関係で結びつけられていたことは周知のことである。明とアユタヤとの関係もこの枠組みのなかにあるとされ、従来の諸研究は両王朝の朝貢貿易を中心としてその形態と時代にもなう変化を論じてきた。ただし、両国間を往来した外交文書については十分に研究されていない。本報告は、アユタヤ国王から明皇帝への文書がどのような段階を経て、どのような機関を通じて送られたか、またどのような諸種類の文書が使用されたかを考察する。具体的には先行研究者が利用した『大明実録』を再検討する一方で、『殊域周咨録』・『華夷訳語』中の「暹羅館来文」というアユタヤからの国書とその漢訳文の文例集を検討する。

『大明実録』によると、両国が使用した文書は発行者の身分と使用用途によって勅書・表文・咨文および半印勘合等に区別できる。明と朝貢貿易を行うために、アユタヤの使節はこれらの文書を持参し明側に提出する。

まず、表文はアユタヤ国王から皇帝に送る国書であり、「金葉表文」とも呼ばれる。『殊域周咨録』によると、アユタヤの使者は中国に至った際、直ちにそのまま皇帝に表文を進上するわけではなく、いくつかの役所を経る。なぜならば、表文は「回回字」と「番字」で書かれたため、明初設立された翻訳機関である四夷館の回回館の翻訳、および広東から派遣された通事の訳を経てから進上されるからである。そして1579年（万暦6・11）、明が四夷館に暹羅館を増設して以来、表文は同館の漢文訳を経て皇帝に上奏されるようになった。ただし、回回館、広東の通事および暹羅館の館員が表文の内容を正確に訳せたのかは疑問がある。暹羅館が作成した「暹羅館来文」のなかの原文と漢訳文とを比較すると、言葉づかいによって若干違うところがあり、暹羅館の館員が意図的に原文の言葉を「朝貢用語」で漢文に訳したことがわかる。

次ぎは咨文についてである。『大明実録』によると咨文は礼部とアユタヤ国王との間で用いられる書簡であるが、時々アユタヤからの咨文は国王ではなく、陪臣によって発行された。半印勘合に関しては、偽使を防止するために、明は相互に派遣される使者に勘合の持参が義務であるとする。勘合は明が朝貢諸国に給付したものであり、明の皇帝が代わるごとに再造し、再発給される。ただし、15世紀後半以降中国の沿海地方における密貿易が盛んになると、勘合の使用は乱れるようになる。アユタヤの勘合の使いかたも15世紀後半ごろ以降、原則どおりではなかったことは『実録』のなかになんらかの例がみられる。

番字と回回字で書かれたアユタヤからの国書は、明皇帝に伝われるまでいくつかの段階を経たため、その内容が若干変更されていた。また、アユタヤの外交文書の使用によって、明の定めた文書制度は制度通りに必ずしも機能したとはいえないのである。明とアユタヤとは「宗主 番夷」という上下関係であるというように中国側の史料では表現されているが、アユタヤは両国の関係に関して中国の史料が述べるような認識を必ずしも持っていないといえよう。

19 世紀中部ジャワ北海岸におけるイスラーム指導者とプリヤイの葛藤 アフマッド・リファイ運動をめぐる言説を分析して

菅原 由美（東京外国語大学共同研究員）

強制栽培制度の導入（1830 年）に伴う植民地化の進行はジャワ社会に様々な変容をもたらした。プリヤイ（現地人首長層）は、現地人官吏となり、次第にオランダ植民地政府への依存度を深めていった。プリヤイ研究をおこなったサザーランドによれば、プリヤイはジャワの宗教に伝統を持っていたが、次第に世俗化するとともに、イスラームを無視し、「ファナティックなムスリム」としてオランダが恐れる在野のイスラーム指導者を遠ざけた。一方、ジャワ社会におけるもう一つの勢力であるイスラーム指導者層は、植民地政府によって政治への関与の道を断たれた。彼らはより強く中東の思想的影響を受けようになり、プリヤイに対する厳しい批判を展開させ、中には抵抗運動を率いる者も登場したと説明された。この歴史状況について、サルトノ・カルトディルジョは、彼の一連の抵抗運動研究のなかで、この時期の多くの抵抗運動の背景には、プリヤイと在野の宗教指導者との間の権力争いが存在したと説明した。

しかしながら、サルトノはオランダ語史料のみに依拠して研究をおこなったため、プリヤイや宗教指導者の言説が分析されていない。プリヤイが植民地支配に取り込まれた自分の立場をどのように正統化したのか、また宗教指導者はどのような思想や世界観のもとにプリヤイ批判をおこなったのかという内在する論理は彼の歴史叙述のなかには描かれていない。

強制栽培制度導入以降、プリヤイが植民地政府によって重要視されたのは、彼らによる民衆の労働力調達が生産物耕作のために不可欠なものであったためである。よって、プリヤイは民衆への影響力を依然として維持していなければならなかった。そのために、プパティは部下を駆使して社会の動向について詳細な報告を集めていた。結果として、反プリヤイ勢力が武装蜂起にまで至るケースは多くなかったが、プリヤイとイスラーム指導者の間で広げられた民衆の支持を勝ち取るための争いは、むしろ多くの場合、蜂起というかたちをとらずに展開された。たとえば、モスクやプサントレン（イスラーム寄宿塾）等でのイスラーム指導者によるプリヤイ批判などが考えられる。プリヤイはこうしたイスラーム指導者達の行動に対しても注意を怠らず、自分達の正統性を政治上だけでなく、宗教（イスラーム）上からも主張し、批判に対抗した。そうしたプリヤイの行動は、世俗化し、イスラームを遠ざけたとしか、これまで説明されてこなかった姿とは異なり、プリヤイが植民地官吏となった後もジャワ社会における自分達の位置を模索していた様子が浮かび上がってくる。

本報告では、在野のイスラーム指導者によって批判されたプリヤイがいかにその批判をかわし、自分の立場を正統化したか、その正統化の論理を分析し、従来のものとは異なるプリヤイ像を提示することを目的とする。事例として、1840-50 年代に中部ジャワ北海岸プカロガンで支持されたアフマッド・リファイ運動をめぐる展開したプリヤイとイスラーム指導者リファイの衝突をとりあげる。リファイはメッカ巡礼からの帰国後、プカロガン州バタン県カリサラック村において、村人に正しいイスラームを教えるために、アラビア語ではなく、アラビア文字のジャワ語（ペゴン）で多くの教本を執筆し、教育活動をおこなった。彼は特に著書のなかで、オランダと戦わないプリヤイやそのプリヤイに従う宗教役人に対し強い非難を浴びせ、民衆には彼らに従うことのないように説いていた。そのため、プリヤイの不

興を買い、彼は 1859 年にアンボン島へ追放された。

この運動は、オランダ語史料だけでなく、リファイ本人が著した本が多数残されているため、彼の思想を分析することが可能であり、またリファイが起こした「騒動」について取り扱った宮廷文学『チャボレックの書』が存在するため、これを通して、リファイと対立した現地人植民地官吏や宗教役人の視点をも明らかにすることができる。リファイは正しいイスラーム実践のための知識修得の重要性とウラマーのあるべき姿を説き、社会を救済しようとした。一方、プリヤイはオランダ植民地政府による信頼と、マタラム以来の宗教役人プンフルの権威を正統性の根拠とし、リファイを無知で傲慢な「異端者」・「攪乱者」として、ジャワからの追放を要求した。

バンテアイ・クデイ遺跡（シェムリアップ・カンボジア）発掘調査報告

- 274 破片の仏像出土からみる 12 世紀末から 13 世紀のアンコール -

丸井雅子（上智大学アジア文化研究所共同研究員）

バンテアイ・クデイ遺跡は、アンコール時代の 12 世紀末から 13 世紀初頭にかけてジャヤヴァルマン 7 世王によって建立されたといわれている寺院である。

2000 年 8 月、2001 年 3 月、そして 2001 年 8 月から 10 月にかけて実施された同遺跡における発掘調査により、仏教の石像片など 274 点が出土した。これらの仏像片は、大半が損壊を受けた状態で出土している。これほど大量の石像片が、発掘調査によって出土した例はこれまでに他では類を見ない。調査によって観察された状況をまとめ、その背景を検証したい。調査成果と、議論の焦点は以下のとおりである。

1. 調査成果 土の堆積状況の観察から、これらの石像群は人為的に掘られた穴に一括して埋め込まれていったことがわかっている。穴は深さ約 90cm、壁はほぼ垂直で、底は 2m 四方の大きさをもつ。この穴に石像がぎっしりと埋められ、さらに瓦や陶器片を砕いて混ぜこんだ土によって覆われている。この土は非常に堅くつき固められており、その表面からは列石が検出されている。出土した石像は、その多くが仏像であり、これまでの美術様式を踏襲するのならば、「ナーガ上に坐す仏陀」のうち 12 世紀末から 13 世紀初頭にかけてのパイヨン様式に属するものが多勢をしめる。数は少ないが、それより早い時期に設定されているバプオン様式、アンコール・ワット様式の仏像も散見される。また、パイヨン様式以後の特徴をもつ仏像も出土している。それらは大半が頭部あるいは胴部のあたりで、損壊を受けた状態で出土した。調査後の整理作業の段階で、（同じ穴の中ではあるが）離れた箇所から出土した頭部と胴部が、同一個体であることがわかったものも 2 例ある。残存している石像自体の保存状態は非常に良好である。また、東西軸に方向性をともなって埋められた大型石柱や、穴の壁に立て掛けて据えられた大型立像などが、注目される。

2. 議論の焦点 出土した石像群が、大乘仏教を信奉していたジャヤヴァルマン 7 世の時期にバンテアイ・クデイ寺院内に奉納されていたことは、幾つかの周辺状況の検証により確実である。

一見するとジャヤヴァルマン 7 世王の死後に即位した、シバ教徒の王による偶像破壊行為とも受けとめられる。しかし、壊れた状態の石像、ほぼ完全な状態で出土した石像、壊れているが一括遺物として頭部と胴部が復元できた仏像、など石像の状態は様々である。また、方向性を意識して埋められた石柱、壁に立て掛けられた仏像、など埋納にも配慮が伺える。石像を壊した「人」および「時期」と、穴を掘って埋めた「人」および「時期」は、区別して理解すべき問題である。考古学的に年代を確実に決定できる遺物は供出していないが、当時の歴史背景とも併せて、この石像群埋納という状況を解釈し、バンテアイ・クデイ遺跡そのものにおける位置付け、およびアンコール史全体における位置付けを考えてみたい。

資料：

Masako Marui, 2001 a, "Buddha Statues excavated from Banteay Kdei temple, on 30th and 32nd mission (2000-2001)," Renaissance Culturelle du Cambodge, vol.18 (Tokyo: Institute of Asian Cultures, Sophia University, 2001)

紅河デルタの村落形成に関する考古学的研究

ナムディン省バッコック村の調査から

西村 昌也（東南アジア埋蔵文化財保護基金）

西野 範子（金沢大学大学院）

はじめに 村落が社会単位として非常に大きな意味を持つヴェトナムにおいて、一つの村落を各分野から検討することは、ヴェトナムの社会を理解する上で重要である。しかし、これまで、ヴェトナムはおろか東南アジア全体でも一つの伝統村落をその形成開始期から現在まで、考察したものは無い。理由は文字等の資料の不完全さゆえである。本研究は文字資料とは全く別に、物質文化を基準とする考古学で、一つの村落形成史を"測量"するとどうなるかということを目的にしている。

地理的歴史的背景 ナムディン省ナムディン市郊外のナムディン川を南境とするタインロイ（Thanh Loi）社は紅河平原デルタ域に属している。当地域では残丘部を除いて、各集落は自然堤防などの微高地上に立地している。ズオンライ（Duong Lai）集落が立地する微高地は完新世半ば以前より形成された时期的に古い砂碛列だが、バッコック村（旧百穀村）は現ナムディン川の旧流である Coc 川の緩い自然堤防沿いに形成された集落である。この自然堤防は完新世半ば頃から形成されたと考えられる。コック川から、現ナムディン川への流路変化はそう遠くない時代のものと考えられ、フーコック集落（旧富穀社）はその過程で形成された自然堤防上に立地している。

文献史からの研究は、バッコック集落の開祖を陳朝期に移住してきた集団であること、百穀社、富穀社ともに 16 世紀には存在したこと、北接するタンコック（旧小穀）集落はバッコック村からの分村伝承を持つことを明らかにしている。また、デン（神社）などの村落信仰守護神に黎大行の皇后楊文娥や范百虎（十二使君の一人）などの 10 世紀の人物が祀られ、黎朝開国功臣の裴於臺がもともと村の守護神主神であったことなども、聞き取り等から明らかにしている。

発掘調査所見 1996 年から 2000 年にかけてバッコック村が位置する微高地 6 地点：北からソムアー（XA 地点）、ソムバー（XB 地点）、ソムサー・サンカオ（XCSC）、ソムベング（XBN1-2 と XBN3 地点）、西隣のズオンライ集落のズオンライゴアイ（DLN 地点）、ズオンライチョン（DLT 地点）の 2 地点、東隣のフーコック集落 1 カ所での小規模な発掘調査と周辺域の表採調査を行った。

バッコック微高地 XA 地点は、現墓地に南接したところだが、17 世紀初頭頃を最古とする、墓群が確認された。具体的居住面は確認されず。

XB 地点では 17 世紀に、盛り土による居住面を造成した後、連綿とした居住面が確認された。

XBN1-2 地点、13 世紀から 15 世紀にかけて形成された廃棄坑が確認された。

XBN3 地点では新石器時代の多少の遺物の確認があった。14 世紀を下限とする土間式住居が確認された。

XCSC 地点では 17 世紀を下限とする遺物群が確認され、もともと低湿地のような場所を、盛り土により埋め立てて居住面を造成している。

Phu Coc 地点では居住開始が 17 世紀までしか遡らず、19 世紀末から 20 世紀前半にかけての高級陶磁器を含む多量の遺物廃棄群が確認された。DLT 地点では、13-14 世紀を嚆矢とする連綿とした居住面形成が確認された。18 世紀の住居址では家の基礎に護符を壺等に入れて埋納する遺構も確認された。

DLN 地点では、3-5 世紀に比定可能な磚が出土。また 11-12 世紀頃に形成された土坑が確認され、19 末

-20 世紀に比定可能な建築基礎とそれに伴う高級品を含む大量の陶磁器を確認した。

陶磁器，水上交通と遺跡機能 年代判定が最も行いやすい施釉陶磁器の碗皿資料を時期別に分けて統計をとり，各地点の居住頻度を判断すると以下のようにたどれる。

1：バッコク微高地の中央部では新石器時代に小規模な居住が存在。これは紅河デルタ居住域の最前線に位置していた可能性あり。

2：ズオンライ，バッコクともに 1-10 世紀の居住痕跡を残す。特に 8-9 世紀以降になるとバッコクの XBN 地点での居住が明瞭となるが，ズオンライではほとんど居住がみられない。

3：11-12 世紀になるとズオンライでの居住が再び明瞭化するが，バッコクの XBN は安定した居住が存在したようだ。

4：13 世紀後半以降は XBN 地点での居住規模が拡大化し，14-15 世紀にその最盛期を迎えている。

5：16 世紀以降は XBN 地点での居住頻度は前段階に比べ衰退するが，20 世紀まで連綿と居住は続く。XBN 地点以外のバッコク各地点では 17 世紀以降の居住頻度が増加をし，フーコックやタンコック現集落の居住も開始される。

生産地（国外かヴェトナムか），稀少器種を陶磁器の質の判断基準にした場合，9-11 世紀と 14-15 世紀の XBN 地点が他を圧倒している。また，運搬容器である無釉陶器は 13-15 世紀の XBN 地点が他を圧倒している。これは当地点が川縁の船着き場で，交易や物流の中心であったことを示している。

さらに，19 世紀末から 20 世紀前半のフーコック地点とズオンライの DLN 地点では各種のヴァラエティに富んだ陶磁器を出土しており，豪農や里長の居住地であったことを裏付けている。

物質文化や居住の形態から富裕者がいたと明らかに指摘できるのは上記の 14 世紀から 15 世紀前半の XBN 地点と 20 世紀初頭の DLN 地点と PC 地点のみである

他遺跡史料や他分野史料との対照 XBN 地点での 13 世紀以降の居住活発化は裴允族などの陳朝期の移住と整合性をもっていよう。交易や物流に基づくであろう 14-15 世紀の XBN 地点の繁栄は，同時期の科挙合格者，裴募，裴光家そして黎朝開国功臣，裴於臺 3 人を輩出した経済的背景になっていると考えられる。ナムディンの天長府周辺は皇族の荘園（田庄）伝承を残しているが，当村落には皇族関係のものではないが，13-14 世紀段階に陳朝配下の集団による，交易の要所を利用した形での本格的開拓が行われた可能性は十分あろう。天長府外港と考えられるバイハラン遺跡は，XBN 地点よりさらに高級な陶磁器が出土している。しかし，存続期間において，バイハランは 13 世紀第 2 四半期くらいから 14 世紀前半に限定されるのに対し，XBN は 15 世紀まで連綿と利用されている。これはバイハランが天長府の実質的活動期間に影響されているのに対し，XBN 地点が陳朝皇室とは違った勢力下のもと，交易拠点として機能していた可能性を示している。

また，10 世紀の前黎朝や 12 使君関係の伝承も，XBN の考古学資料が示すように，水上勢力との関係を反映したものだ。

17 世紀のある時期にバッコクとその周辺域は新村設立と居住域の拡大を，盛り土などによる居住面の高レベル化で実現している。この現象はハイズオン省，バックニン省，ハノイでも確認でき，紅河平原全域での現象である。筆者はこうした集落の高レベル化が，堤防の完全輪中化（馬蹄形型輪中から閉鎖型輪中）などの堤防体系の進化を意味しているのではないかと考える。こうした現象を通じて，現在に通じる集落景観ができあがったようだ。文献史からはあまり言及されない 17 世紀だが，紅河平原域の集落史における大きな画期であることは間違いない。

参考文献

- 桜井由躬雄(1995)「陳朝期ベトナムにおける紅河デルタの開拓-新デルタ感潮帯の開拓-」『東南アジア世界の歴史位相』山川出版
- 桜井由躬雄(1998)『重修欽定百穀社史註』(バックコック調査隊内配布資料)
- 桜井由躬雄(2000)「紅河デルタにおける地域性の形成」坪内良博編著『地域形成の論理』京都大学学術出版 263-300 頁
- 西野範子, チン・ホアン・ヒエップ, 西村昌也(2001)「Xom B 地点の試掘」『百穀社通信』12号(印刷中)
- 西野範子(2000)『陳朝期ナムディン省出土碗皿の製作技法による分類』2000年度金沢大学大学院提出修士論文
- 西村昌也, 西野範子, チン・ホアン・ヒエップ, グエン・クオック・ホイ
(1998)「1997年度夏期考古学調査の概報」『百穀社通信』8号 ヴェトナム村落研究会
- 西村昌也, 西野範子, 平野裕子, チン・ホアン・ヒエップ, 向井互(2000)「1998年度と1999年度の夏期考古学調査の概報」『百穀社通信』10号 ヴェトナム村落研究会
- 西村昌也「Phu Coc 地点の試掘概報, ならびにバックコックと周辺の居住史に関する覚え書き」『百穀社通信』12号(印刷中)
- 春山成子(1999)「ハンドオーガーを用いた簡易ボーリング調査と空中写真を用いた微地形分類図について」『百穀社通信』9号 ヴェトナム村落研究会

カレン系民族の分類に関する諸問題

新谷 忠彦（東京外国語大学）

カレン系民族は、ビルマ、タイに数多く分布しているが、その実体はあまりよく分っていない。こと言語に関しては、これまで信頼に足る資料の存在するグループはスゴー・カレンとポー・カレンくらいで、この他にはパオについてのデータが若干存在する程度であった。特にパダウン語やパクー語などをはじめとする Central Karen と呼ばれているグループについては、まともなデータが殆んど存在していなかった。しかし、近年、Henderson(1997)や Solnit(1997)の研究成果が公刊され、更には発表者自身の長期間に渡る断続的な調査などによって、少しずつ科学的なデータが入手できるようになってきた。カヤー州やカレン州などに住むカレン系民族の小さなグループについては自称、他称、別称が多数入り乱れており、一体幾つのグループが実際に存在するのかについてもよく分っていなかったが、発表者自身がフィールドワークで得られたデータを吟味整理した結果、ひとまず 15~20 程度のグループの存在を確認するとともに、その言語の素姓をある程度知りうる状況になってきた。今回の発表では、先ず、Central Karen と呼ばれているグループに焦点を当て、彼ら自身が自分たちをどのように分類しているのかを紹介し、その分類を言語データによって検証する。カレン系民族自身の分類については、発表者が各地で接触できたカレン系民族とのインタビューの内容を整理したものである。言語による分類については、各言語の音韻体系、声調分岐及び音韻変化のパターン、基礎語彙を比較することによって言語間の親疎を測る古典的な手法を用いる。その結果、彼ら自身の分類と言語による分類が必ずしも一致していないことが分ってくる。更にこの方法を拡大し、カレン系言語全体をどのように把握・分類したらよいかを検討する。その結果として、Central Karen といった分類があまり合理的な分類ではないことが分ってくる。また、同じ地域に住む大多数の民族については、中国に同じか、または近い民族がいるのに対して、カレンは中国に同一または類似の民族を全く持っていない。このような状況をどうとらえたらよいのであろうか。こうした問題についても、最新の言語データを使って、手掛かりがつかめないか検討する。使用する言語データは、殆どは発表者自身の断続的なフィールドワークによって得られたデータであるが、一部 Henders cm(1997)及び Solnit(1997)のデータも使う。

シンポジウム《17世紀を再考する 「交易の時代」の終焉をめぐる 東南アジアと朝貢システム》 趣旨説明

渡辺佳成（岡山大学）

東南アジアの歴史像は、大きく塗りかえられようとしている。ケンブリッジ、山川の東南アジア史、岩波の講座東南アジア史などの出版によって、その歴史を総合的に把握することが容易になり、個々の研究者は自らの専門とする時代、地域の歴史像を全体の中に位置づけ検討を加えることによって、研究を深化させることが可能となったように思える。

しかしながら、各書で示された東南アジア史の全体像は必ずしも一様ではない。長期的で地域全体にわたる変化をどのように捉えるのか、その要因と各地域への影響をどの程度評価するかによって、時代区分のあり方は異なっている。こうした研究状況の中で、東南アジア史の時代区分の妥当性を検証する第一歩として、本シンポジウムでは、「交易の時代」に焦点をしばって、検討を加えていきたい。

植民地期以前の東南アジア史の研究で、従来の歴史観に革命的变化をもたらしたのが、リードの提唱する「交易の時代」という時代区分であることは、言うまでもない。そこでは、15世紀以降急速に発展していく国際交易が東南アジアの各地域に大きな変化をもたらしたことが明らかにされ、その特徴が以下のように説明される。商業の活況とコスモポリタンの都市の繁栄、域内の交流の緊密化とイスラームなどの世界宗教の普及、交易のもたらす富と火器の普及による新たな「集権的」国家の誕生などの事象が東南アジア全体を通じて起こり、経済、文化、政治の諸側面に明らかにそれ以前の時代との画期が見られる。そして、世界史的な「17世紀の危機」の中で東南アジアが国際交易から撤退していくとともに、そうした動きは減速していき、17世紀末には、「交易の時代」は終焉を迎える。

そこで明らかにされた時代相は、単に東南アジア史の枠組みに止まらず、東南アジアを世界史の議論の中に組み込んでいく上でも重要な示唆を多く含んでいる。近現代に直接つながる「伝統社会」が形成された時代として「近世」を再検討しようという議論に、東南アジア史が積極的に関わっていく基礎が「交易の時代」論によって用意されたと言ってよいだろう。しかし、そこには、なお検討を要する課題が多く残っていることも事実である。

まず問わねばならないのは、時代区分の妥当性、なかでも、「交易の時代」の終焉についてである。その変化は一様ではないし例外も存在するが、東南アジア島嶼部については、17世紀に画期を求めることはほぼ間違いのないように思える。しかし、大陸部については、諸変化の要因としての交易の持つ比重が島嶼部とは異なり、17世紀末に画期を設けることに意味があるのか疑問が残るところである。

そこで、本シンポジウムでは、17世紀の東南アジア大陸部に焦点をしばって、時代の諸相に検討を加え、この問題を考えていきたい。具体的には、トンキン、アユタヤ、アラカン（ビルマ）を取り上げ、交易の有り様の変化について検討を加えるとともに、そうした変化とそれぞれの地域における経済、政治をふくめた社会全体の変化の間に密接な関連性が見られるのかについて報告を受け、そこから17世紀という時代を考え、18世紀以降の時代とはっきりと時代区分することが可能なのか検討を加えてみたい。

トンキンの生糸貿易 VOC資料から

奈良 修一（東方研究会）

「近世」の海上貿易において、重要な交易の一つは、「糸銀貿易」といわれる、シナ海をまたぐ生糸貿易であろう。16世紀以来、貨幣経済を発展させた江南地域では大量の高品質の生糸を生産する。それを金銀産出地である日本が輸入したのである。

この貿易自身は、中国と日本の直接交易が可能であれば、東シナ海だけの貿易であったが、後期倭寇といわれる密貿易が盛んになったことから判るように、寧波の乱以降、明朝と日本の直接交易は不可能になっていた。それゆえ、台湾やトンキンを迂回する交易が盛んとなる。

17世紀になりオランダ東インド会社（VOC）がこの地域の貿易に参入してくる。最初、中国との直接貿易を希望し、交渉を行っていたが成功しなかった。そのために、日本との貿易に中心を移し、生糸を持ち込み、金銀と交換するようになった。この貿易においても、台湾を中継基地とし、中国の生糸の他、トンキン生糸を商っていた。

17世紀半ばの明清交代期において、江南地域からの生糸が手に入りにくくなると、その分、トンキン生糸の重要性が増した。それまで、トンキン商館は日本商館の支店の存在であったが、1650年から独立の商館となった。

しかし、このトンキン商館の最盛期も17世紀中葉の短い期間だけであった。というのも、もともとトンキンで産出される生糸の質があまり良くなく、また、中国商人との競争において、VOCは必ずしも有利な立場を築き得なかったからである。

VOCにとっては幸いなことに、別の場所で生糸を得ることができた。それがインドのベンガルである。この地で生糸を得るばかりでなく、日本向けに生糸を製糸する工場を造り、さらに、日本から得た銀をベンガル向けに貨幣に鑄造する工場まで設けたのである。これにより、17世紀後半において、VOCの対日生糸貿易の拠点はトンキンからベンガルに移る。

1683年、鄭氏の台湾が清朝支配下に入ってから、中国商人が自由に海外にでられるようになり、多くの商人が日本に来航した。大量の金銀が海外に流出することを畏れた江戸幕府は貿易に制限を加えるようになり、長崎を通じての生糸貿易は減少することとなった。このために、VOCの対日生糸貿易も打撃をうけることとなり、トンキン商館の持つ意味はますます減少した。かくして、1699年にこの商館は閉鎖されることとなり、VOCの貿易ネットワークからトンキンはその姿を消していくのである。

シンポジウム報告 要旨 02

17 世紀後半におけるシャムの対日貿易

飯岡 直子 (チュラロンコン大学大学院)

ムラウー王朝前半期(1430-1700)における海上貿易とアラカン

Aye Chan (神田外語大学)

アラカン山脈とベンガル湾の間に細長く横たわるアラカンでは、農業社会が発展してきたが、1430年にベンガルの軍事的援助のもと建国されたムラウー王朝は、ベンガル湾における強国として発展していく。16世紀には、国際交易と深く関わっていき、国家の独占下で行われる貿易から得られる利益や税収の増加は、王国の発展の大きな要因の一つとなっていく。建国当初よりベンガル東南部への勢力伸長に熱心であったムラウー王朝は、1531年、チッタゴンを支配下に収めることに成功し、それ以降、アラカンは、ベンガル湾交易において重要な位置を占めるようになる。

チッタゴンは、ムラウー王朝の支配下で、ベンガル地域の商業的中心として繁栄し、アラカンにおける鑄造貨幣の使用と流通は、王国の対外交易の発展をさらに促進させることとなった。かつてのアラカンの交易相手は、そのほとんどがゴルコンダのインド商人であったが、そこにポルトガルが参入してきた。17世紀初頭にオランダがアラカンとの貿易に参入してくると、ポルトガル人の多くは海賊行為に従事するようになり、ガンジス・デルタを襲い、捕らえられた人々は奴隷として売却されていった。その奴隷の市場として最も大きな位置を占めたのが、ムラウーであった。

オランダにとって、アラカンとの貿易は二次的な重要性しか持たなかったが、そこで取り引きされた主要な商品は、米と奴隷、ラックなどであった。ムラウー王朝では、これらすべての商品が王の独占下に置かれたが、オランダは忍耐強く貿易を続け、アラカン王国が1660年代半ばにムガルとの戦争に敗れチッタゴンを喪失するまでこの関係は継続していく。

こうした動きを見てみると、アラカンは、アンソニー・リードが「交易の時代」と呼んだ時期に、海上交易から、多くの恩恵を受けているように思える。この時代に、アラカンのムラウー王朝は、政治制度、社会・経済構造、文化のそれぞれにおいて、大きな変化を体験している。たとえば、社会全体としては仏教的要素を基本的に維持しつつ、政治的局面では、ベンガルとの緊密な商業関係、文化接触によって、イスラムの思想が大きな意味を持つようになったし、王都のムラウーは、17世紀のビルマのどの都市よりもコスモポリタンの要素を持つ都市であった。本報告では、こうした諸側面を検討しつつ、この時期のアラカンに、リードの提示した島嶼部の歴史像との類似性が見られるのかを、検証していきたい。